

フットケアからはじめる当事者支援！ フット・プラネタリウム展示中

1986年に在宅看護研究センターを設立し、開業ナースの草分けとしてわが国の在宅看護を切り拓いてきた村松静子氏（在宅看護研究センターLLP代表）が開発に携わった機器「フット・プラネタリウム」が、在宅看護研究センター付属訪問看護ステーション（東京都新宿区）にて、地域住民のためのオープン展示・デモンストレーション提供が開始された。

「フット・プラネタリウム」とは

「フット・プラネタリウム」は、足裏マッサージ専用のコミュニケーション・ツールだ。施術を受ける側（写真①）が、



「フット・プラネタリウム」開発・PRチームの皆さん。右端が村松ひろ氏。

目の前のディスプレイ画面をタッチし、指圧箇所や強弱についての要望を施術者（写真②）に伝えるしくみになっている。最後に要望箇所がプリントアウトされる（写真③）、自身の健康状態の参考に持ち帰ることができる。要望を言葉ではなく、画面を通して視覚的に伝える点が、通常のフットケアとは異なる。言葉や態度で示す直接的なコミュニケーションがとりにくい患者・利用者やその家族のために、細部の工夫が凝らされているのが特徴であった。画面には満天の星など、利用者がリラックスできるビジュアル素材が表示され、宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』をモチーフにしたアイコンが用いられている。機器の名称はこれに由来する。

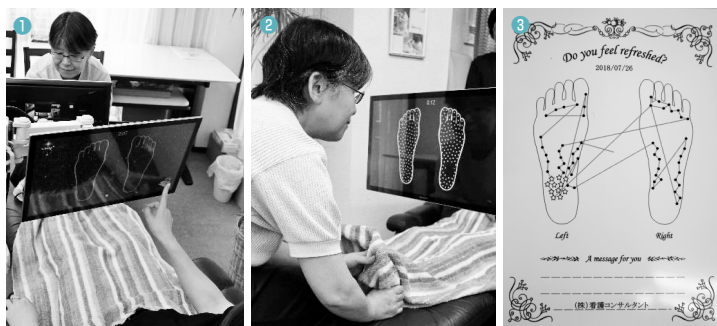
開発の経緯

通常のマッサージやフットケアで施術を受ける側は、マッサージの仕方や力加減に関する要望を言葉で伝える。しかし、周囲の状況や施術者に対する遠慮から、「強すぎて痛い」「場所が少しずれている」といったことを伝えるのをためらう人も多い。また、施術者と会話自体がストレスになることもある。非言語的なコミュニケーション・ツールを用いれば、そんな言葉に出して言いにくいことを伝

えやすくなり、結果としてケアの満足度の向上につながるのではないか……。この考えから、フット・プラネタリウムは誕生した、と開発・PRチームの1人である村松ひろ氏（看護コンサルタント株式会社国際交流研究企画室）は語る。読者の皆さんもレストランや美容院、歯科医院などのさまざまな場面で、自分の要望を正直に伝えることを躊躇した経験があるのではないだろうか。こうしたことは、医療現場でも頻繁に起きていると考えられるが、そこに非言語的なコミュニケーション・ツールが選択肢として用意されていたら、利用者・患者中心のケアに近づくことができるのではと、同氏は話した。

言いつらい本音をそっと 伝えるツールとして

実際に体験してみたところ、目の前のディスプレイ画面に夜空の星がゆつくりと動いてく様が映し出され、見ているだけで心が柔らいだ。また施術中、画面にタッチすることで、「もっと強く押してほしい」「ツボから外れている、押す場所を変えてほしい」など、面とは向かって言いつらい本音を静かにそっと伝えられた。言葉以外の方法で心の声を伝えるツールがあることで、マッサージをより気持ちよく受けることができた。ステーションを訪れる来客たちの評判も上々で、地域に開かれた訪問看護ステーションに



①施術を受ける側は画面をタッチしてリクエスト、②施術者はその要望を画面で確認し、主要箇所をマークできる。③最後にプリントアウトされる足ツボマップ（星座状）。

よる、「地に足の着いた」試みとして有意義であらう。

秋田県の企業と共同開発したこの商品の詳細は、看護コンサルタント株式会社の<http://www.nurscJapan.com/nci/>に問い合わせただきたい（文・写真 編集室）。